沖縄県立博物館・美術館 美術館紀要第 13 号（Bull. Art Mus, Okinawa Pref. Mus. Art Mus., No.13）pp. 11-16、2025

大城皓也作の油彩画作品 ≪イエファィイエファィ（A）≫修復について～修復作業報告～

Restoration of <<Iefai Iefai（A）>>, an Oil Painting by Oshiro Kohya – Restoration Report –

梶原　正史　KAJIHARA Masashi

Our museum's collection of oil paintings by Oshiro Kohya exceeds 100 pieces. Most of these pieces have suffered some kind of damage, including insect damage and mold damage. It is assumed that this damage was caused by the fact that the pieces were stored in high-temperature and high-humidity environments before they became part of our museum's collection.

In this study, we conducted backing on the piece using gelatinous glue and Japanese paper in cooperation with a technician from Taiwan for the restoration of <<Iefai Iefai（A）>>, an Oil Painting by Oshiro Kohya. Although it is a matter of course that we restore the piece while taking into consideration its conditions, it was extremely meaningful to exchange information on restoration techniques between Taiwan and Okinawa, which have similar climates. In this study, we took photographs of the state of the piece in stages to explain how restoration was done, recorded the states before and after restoration, reflected on the restoration work, and accumulated information on the techniques at the end.

はじめに

当館が収蔵している大城皓也作の油彩画は 100 点を超える。その作品ほとんどが虫害や黴害など何らかのダメージを受けている。当館に収蔵されるまで、高温多湿の環境で保管されていたことが要因であると考えられる。

当館では、特に損傷具合の激しい作品から修復作業を進めてきた。修復作業を通じて、作品組成や、文献から得た知見を書きとどめておくこととしたい。油彩画の修復について、段階的に状態写真を撮り、どのように修復したかを説明するとともに最終的には修復前、修復後の状態を収め、修復作業の振り返り、技術の蓄積を行う。

1. 大城皓也について

以下、この節は島筒格「大城皓也のタブロー・エスキース調査」『沖縄県立博物館・美術館美術館紀要第 6 号』46-64 頁、沖縄県立博物館・美術館、2016 より筆者修正、抜粋した。

大城皓也は 1911（明治 44）年に那覇区に生まれた。県立第二中学校に入学後は、美術グループ「樹緑会」(注 1) のメンバーとなる。同会では、先輩に名渡山愛順ら、同期に大嶺政寛、政敏兄弟らがいた。1929（昭和 4）年に東京美術学校西洋画科に入学、在学中の 1932（昭和 7）年に、南風原朝光らと「沖縄美術協会」を設立した。東京美術学校を卒業後は沖縄に戻り、私立開南中学校の美術教師として赴任する。

1938（昭和 13）年に南風原朝光の案内により、藤田嗣治、加治屋隆二、

注 1
1922（大正 11）年、図画教師西銘生楽が中心となり、県立第二中学校生徒によって結成されたグループ。

竹屋富士夫が沖縄を訪れる。当時、二科会顧問だった藤田の勧めにより、翌 1939（昭和 14）年から、二科展への出品を始め、同年の第 25 回展で《農夫と少女》、《馬と遊女》が入選する。

1943（昭和 18）年、戦禍が増す中で二科展への出品が途絶え、1944（昭和 19）年の那覇大空襲で開南中学校は消失。大城の戦前に描いた作品のほとんどは、戦時中に焼失した。(注 2)

終戦の 1945（昭和 20）年、米国軍事政府が設立され、そのもとで石川市東恩納に沖縄諮詢会が組織される。その機構の中に文化部芸術課が設置され、大城の他、山田真山、屋部憲、金城安太郎、大嶺政寛、山元恵一らが技官として招集された。1946（昭和 21）年 5 月に米軍政府は知念地区玉城村親ケ原に移転を開始し、沖縄民政府も佐敷村へ移転したが、美術家たちは、そのまま東恩納で制作を続けるように指示を受けていた。1947（昭和 22）年 7 月、大城は、名渡山愛順、屋部憲、山元恵一らとともに「沖縄美術家協会」を結成し、同年 8 月から同協会主催の美術展を開催し好評を博している。

1948（昭和 23）年、民政府文化部の解消により、首里儀保町のニシムイに大城、名渡山愛順、屋部憲、山元恵一、金城安太郎、具志堅以徳、安谷屋正義、末吉安久は美術村を建設し移り住む。

1949（昭和 24）年に第 1 回沖縄美術展覧会（のちの沖展）が開催され、大城は、名渡山愛順、大嶺政寛、山元恵一とともに審査委員を務めた。

1950（昭和 25）年に琉球大学が創設されると、応用学芸部芸術科の助教授となるが、2 か年で辞職する。

その後の大城は、自身の創作活動とともに、後進の指導に尽力した。大城自身も戦争により途絶えていた二科展への出品を、1955（昭和 30）年より再開し、1958（昭和 33）年《蝶の島》で会友推挙、1964（昭和 39）年《墓地の子供たち》で会員推挙される。

1966（昭和 41）年に行われた、久高島の神事「イザイホー」には自ら取材に赴き、その後に前述の《神々の誕生》を含めたイザイホーをモチーフとした作品を多数描いた。

1975（昭和 50）年に大城唯一の画集「大城皓也の世界」を出版、後年は体調にすぐれず 1980（昭和 55）年に逝去、享年 69 歳であった。

2. 作品の履歴について

今回、修復を行った作品は 1967 年作≪イエファィイエファィ（A）≫（以下本作品）F100 号の油彩画である。

大城皓也は前述のとおり久高島の神事「イザイホー」をモチーフとした連作を 1966 年ごろから発表する。

本作品が描かれた 1967 年は大城にとって特別な意味を持つ年である。

注 2
画集「大城皓也の世界」に「（戦前の）全作品を戦禍で失う」と記載。

写真 1

写真 2

同年、≪神々の誕生≫(写真1) ≪神々の誕生（B）≫(写真2)、本作品、≪イエアァィイエファィ（B）≫(写真3) という作品を制作、そのうち本作品と≪神々の誕生≫2点を二科展に応募し、2作品とも入選し、≪神々の誕生≫は二科会努力賞を受賞した。(A)、(B) というような同タイトルで同テーマの作品を2枚描いていることからも、大城にとってこのテーマがいかに重要であったかが伺える。

詩人大湾雅常は、男性禁足の神聖な行事で、女性が厳粛におのれを身じまい、ニライの海で沐浴してのち、おのれの肢体を完きまでに開いて神の種子を懐胎する、という、天地創造にもなぞらえるドラマを、自らのキャンバスで完結させた…これらイザイホーの連作において、大城皓也は中期の頂点をゆるぎなく打ちたてた、と綴っている。(注3)

本作品の履歴は、2009年の調査で確認されており(写真4)、その報告によると、1995年頃から大城皓也氏の長男である大城青次氏宅に保管されていたが、2000年より保管場所が無人状態となってしまったようである。(注4) その後、2010年の調査から当館への収蔵までのあいだに虫害に侵された額縁・木枠などは当館学芸員、調査員によってある程度の作品数外された記録が残っている。

しかしながら二科会努力賞を受賞した≪神々の誕生≫、≪イエアァィイエファィ（B）≫に関しては、調査記録がなく、現在のところ所在不明である。

3. 修復作業報告

作　者：大城　皓也
作品名：イエファィイエファィ（A）
制作年：1967年
材料・技法：油彩、カンヴァス
寸法（mm）：1630×1305 mm

修復前の所見

支持体は白色の地塗りが施された既製のカンヴァスである。(写真5) 虫害に基因したと思われる欠損が多く、左下角部から右下角にかけての欠損、画面上部は絵具層の剥落が生じていた。(カラー頁) 上記の通り、当館での収蔵のため、虫害に侵された木枠は外されていた。画面下部のカンヴァスは虫害によって耳部分が欠損しており、柔軟性を失っている。カンヴァスが全体的に硬い印象があり、少し引っ張れば裂けてしまうような状態であった。特に画面や耳部分にやや黄色みがかった土のようなものが付着していた。それはシロアリによる蟻道（ぎどう）であった。蟻道とは、読んで字のごとく蟻の道で、蟻道は蟻土（ぎど）と呼ばれる、土壌や木材のカスにシロ

写真3

注3
大湾雅常「彩られた精霊のドラマ - 大城皓也画集に寄せて -」『大城皓也の世界』112頁、「大城皓也の世界」編集委員会、1975

写真4

注4
吉田祥子「平成21年度　美術品調査報告」『沖縄県立博物館・美術館　美術館紀要第1号』62-67頁、沖縄県立博物館・美術館、2010

写真5

アリの排泄物・分泌物を練り合わせたものをセメントのようにペタペタ塗り固めて作る。これが作品表面に付着しており、この分泌物の影響なのか蟻道下層の絵具は非常に脆弱化しており、粉のようになってしまい、剥落している部分があった。裏書はあり、会員の大きな文字が確認できる。(写真6) 大城は当時二科会の会員であるため、67年の二科展に出品した際のものと思われる。また、画面ところどころに虫糞などの付着物が確認された。(写真7)

絵具層の固着具合は全体的に悪くはないが、柔軟性を失ったカンヴァスにシロアリと思われる画面表裏面からの食害も多く、ゴキブリの卵や水染み、カビと思われる白い斑点状のものが裏面のところどころに見られた。キャンバス自体がない欠損部分付近は絵具層の固着力が弱く、すでに大きく剥落している部分もあり、やはり全面的な基底材の強化が必要と考えられる。

また、画面表面には白っぽい結晶のようなものが見られ、(写真8・9) これはブルーミング(Blooming:湿度の高い条件下でニスを塗布したことにより、ニスが分解し、白っぽくなる現象）と思われる。前述のとおり、保存環境があまり良くない場所での影響があったと思われる。

画面構成としては地塗り部分から青色の下地を全体に塗布したのち、茶系で中央から左辺部分にかけて制作を進め、緑系で人物像を描いていったと考えられる。右辺部分の海が描写されている部分には厚塗りの印象はなく、白色の地塗りが見えているが、画面中央から緑色部分に関してはぼこぼこしたような厚みのあるテクスチャーがあり、何かしらのメディウムを混ぜているような印象があった。剥落部分には下層の青色が露出している部分もあった。
厚塗りとそうではない部分が共存しており、視覚的な遠近だけではなく、物理的にも奥行きを出そうと試みていると思われる。

修復処置

1. 作品の状態を調査し、修復処置前後と処置途中の状態を撮影、記録した。
2. 医療用メスや綿棒を使用し、画面上の蟻道（ぎどう)、虫糞などを除去した。(写真10・11) 膠水（牛皮和膠８%）を接着剤として使用し、絵具層の浮き上がり、剥落箇所を電気コテで加温接着した。接着剤の利きが悪い部分にはエタノール水で浸透させた。
3. 細かく短冊状に切った和紙テープで剥落部分の補強を行った。(写真12・13・14)
4. 全体的に細かな剥落が多く、画面全面に薄く溶いた膠水と和紙で表打ちを行った。(写真15)
5. 裏面の汚れやカビを刷毛、コットンパフ、掃除機で除去した。
6. 作品破れ部分には薄いポリエステル布を使用し、BEVAシートで破れ

写真6

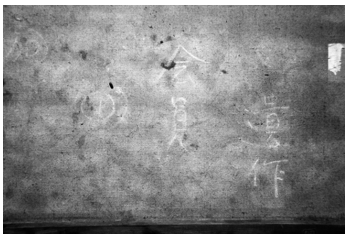


写真7

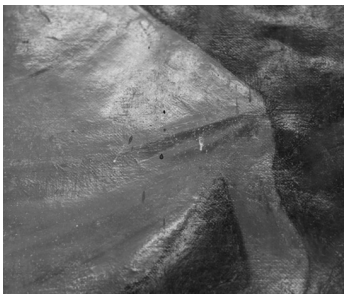
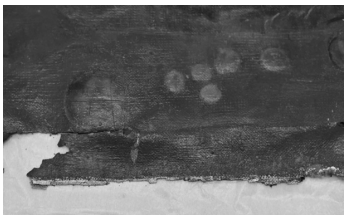


写真8

写真9

写真10

写真11



部分に接着した。

7. 裏打ち用カンヴァス全体にBEVA371を塗布し、本作品を面上で設置した。シリコンシートで全面を覆い、ホットテーブルにて裏打を行った。(写真16)
8. 綿棒とぬるま湯を使用し表打ちの和紙を除去した。また、ホットプレスによって亀裂や浮き上がり部分から染み出た余分な接着剤の洗浄をおこなった。(ぬるま湯を使用) (写真17)
9. 新しい木枠に裏打ちした作品を張り込み、ステンレス製のステープルを使用し固定した
10. 画面のブルーミングの除去(ミネラルスピリッツによる画面洗浄)(カラー頁)
11. 絵具層の欠損部分に充填材（皮膠10%、ボローニャ石膏）を詰め、成形した (写真18)。
12. 周囲の色調に合わせ充填部分に不透明水彩で下捕彩をした後、マットタブローを画面保護として塗布した。仕上げの補彩は溶剤型の捕彩用絵具で仕上げた。

修復後の所見

作品は絵具層の浮き上がりや剥落、固着不良部分を接着、強化し、カンヴァスの変形を修正して新たな木枠に張りなおしたことにより安定した。鑑賞の妨げであった汚れやブルーミングを除去した。新調した木枠にカンヴァスが張りこまれたことにより、全体的に画面の奥行きが感じられ、大城の繊細な表現を感じ取れるようになった。また細かい剥落などは全面的に接着剤を塗布し、ホットプレスをすることで固着した。裏打ち作業後は余分な接着剤（膠）の除去を目的とした洗浄としてぬるま湯を使用し、最終的に画面保護としてマットタブローを使用した。画面全体の白いもやがかかったような、ぼんやりとした印象から色調が戻った (カラー頁)。

4. まとめ

本作品の修復作業では、膠を使用した裏打ちを台湾の雲林科技大学客員准教授であるIoseba Imanol Soraluze Herrera氏にご教授いただき、進めることができた。合成樹脂を含侵させるような裏打ちしか知らなかった筆者にとってこの経験は非常に大きかった。この裏打ちについては正修科技大学藝術中心が発行した陳澄波作品保存修復特展に詳しい工程があるため割愛するが、接着剤としての膠の種類や使用した和紙についても知識を深めることができた。

合成樹脂接着剤を表面から作品に含侵させるような裏打ちのデメリットとしては、裏打ち後、膠などの接着剤が入っていかない、効かない事があげられ、また溶剤でしか接着剤が溶けないため、オリジナルの画面に非常に負担がかかるということがあげられる。濡れ色や退色の例もあり、むし

写真12

写真13

写真14

写真15

写真16

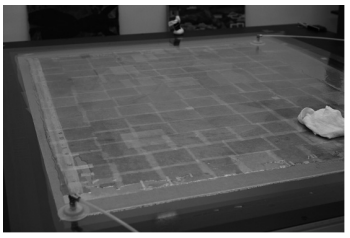
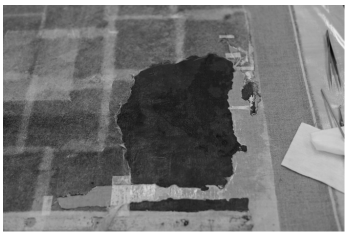


写真17



ろ未だにそのような画面に合成樹脂を含侵させ、裏打ちを行っている人や場所があるということにIoseba氏は驚いていた。

水性の接着剤は数多くあるが、やはりIoseba氏も様々な試行錯誤をした上での経験則では今のところ膠が一番適していると語った。膠水は水性で、ぬるま湯で除去できる。また濃度をコントロールすることで接着の強さを変えられるのが大きな利点であり、今回の表打ちでも膠水の伸びやすさ、浸透のしやすさに関しても驚くことがあり、やはり台湾と沖縄という似た気候条件の中、日々知識や技術を更新・交換していくことは忘れないようにしたい。

現在当館が収蔵している大城皓也作品のおよそ6割がシロアリによる虫害がみられ、破れや地塗り層ぎりぎりまで食害されている作品を飽きるほど見てきた。(カラー頁)

そんな作品画面を安定させるには、やはり裏打ちという作業が有効であると考えている。ストリップライニングやルースライニングなども含めて考えるべきであるが、全面的な裏打ちをする際には、本作品のような裏打ち方法を基本ベースとしながらも作品個々にあった修復作業を進めていきたい。

写真18

引用・参考文献

R・Jゲッテンス＋G・Lスタウト著　森田恒之訳「新装版　絵画材料辞典」株式会社美術出版（1999）
沖縄県立博物館・美術館　美術館紀要第1号　沖縄県立博物館・美術館（2010）
「大城皓也の世界」編集委員会『大城皓也の世界』（1975）
沖縄県立博物館・美術館　美術館紀要第6号　沖縄県立博物館・美術館（2016）

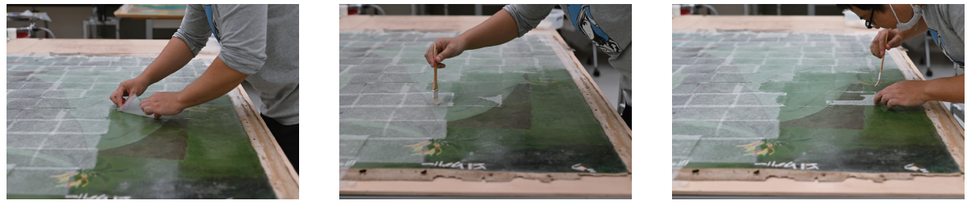
本文 11-16 頁

【修復前】

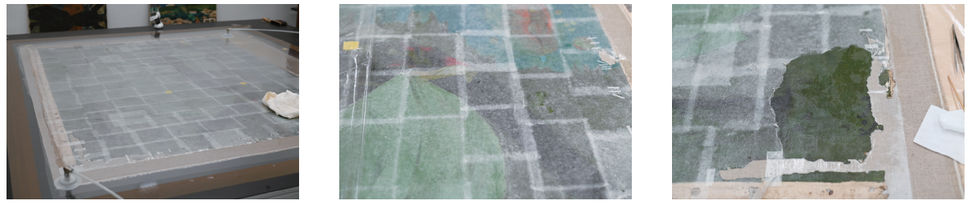
作　者：大城　皓也
作品名：イエファィイエファィ（A）
制作年：1967 年
材料・技法：カンヴァス、油彩
寸法（mm）：1630 × 1305 mm

修復中

表打ち



裏打ち



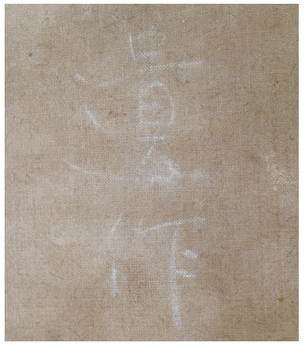
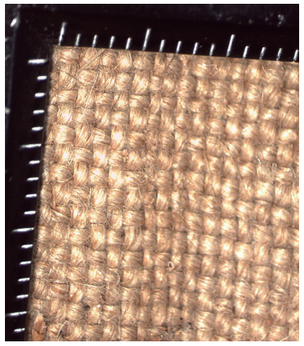
新調した木枠に張り直し

洗浄後

裏面

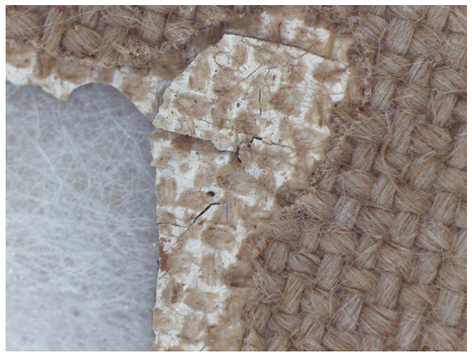
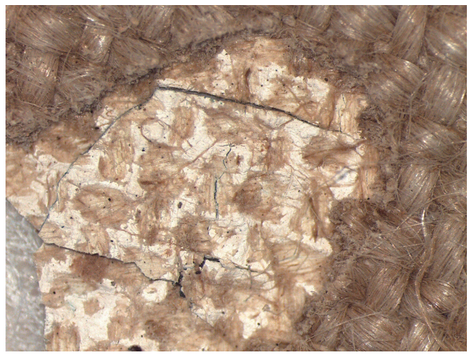
裏面カンヴァス欠損部分

裏書・カンヴァス目・裏面全図

カンヴァス欠損部にポリエステル布を裏面から接着

剥落部拡大 (裏面)

シロアリの食害と思われるが、地塗り層ぎりぎりまでカンヴァス繊維が削られている。

【修復後】

【裏面】